

北海道の演劇作品を読む

～リーディングから上演まで～

北海道ゆかりの作家の演劇作品を読みます。各期3回完結で3期実施します。各期の3回目（最終回）は公開発表会とし、希望者はスタッフとともにポルトホールでのリーディング発表会（照明・音響入り!）に参加することができます。
各期ごとに参加者を募集しますが、もちろん全ての期に参加することもできます。

講師：森一生（舞台芸術研究グループ研究員）

スタッフ：村松幹男 田光子 平井伸之

舞台芸術研究グループ附属劇団員 北翔舞台芸術学生

第1期

9月11日（木） 9月18日（木） 18:30～20:00 9月22日（月）公開発表

数々の高校演劇作品や北海道の創作劇を創造した本山節彌の作品から『ステージメルヘン どさんこ花子』を読んでみよう。

「1986（昭43）年6月29日のことです。8トン積みの大型トラックが、象1頭と駝鳥1羽を積んで旭川・旭山動物園に着きました。ーその大きな木枠を利用した“帰り荷物”があったのです。その“荷物”がその『花子』です。ーメスのインド象。「眼、眼球に光沢なし。」「前足、関節各部に“クル病”が診られる。」「生きていたいのか。ーこつたら体して生きていけるのかー。」「父さんは人間で、花子は象だよ。ー」
父さんと（象）花子の“心の交流”ー。

第2期

10月9日（木） 10月16日（木） 18:30～20:00 10月20日（月）公開発表

北海道は、『生まれ出づる悩み』や『カインの末裔』など有島武郎の文学作品の舞台となったばかりではなく、有島文学の本質的な部分を培った（思想的）源泉であった。有島は小説ばかりでなく戯曲も数多く遺している。『老船長の幻覚』や、中でも三部作といわれる『御柱』『ドモ又の死』『断橋』は忘れてはいけない作品だ。その三部作の中から有島武郎の『御柱』を読んでみよう。

「ー火事をしでかしたは、どこまでもお前様の過ちだが、過ちは誰が身の上にもあるものだでな。」ー若い『嘉助』に年寄りの『平四郎』が、道を譲る形で（語る）ー。“魔性”が招いた付け火の一件ー。

第3期

11月20日（木） 11月27日（木） 18:30～20:00 12月1日（月）公開発表

『火山灰地』『五稜郭血書』『のぼり窯』など北海道を舞台とした往年の劇作家・久保栄の作品の中から、札幌・平岸が舞台となった『林檎園日記』（第2幕）を読んでみよう。

「乳色に薄紅をばかした花が5輪ずつかたまて咲く梢から、甘酸っぱい匂いがしてきて、そこいらにいっぱいになるのを嗅ぐと、どういうわけか、子供の頃、百人堀にそって山の湖水のほうへ通っていたガタ馬車の、あのピポー、ピポーと鳴らしてとおる笛の音が思い出されてー」



主催／北翔大学北方圏学術情報センターPORTO(ポルト)
問い合わせ先／〒064-0801 札幌市中央区南1条西22丁目1-1

電話：011-618-7711 FAX：011-618-7712

